

## 藤原敦光「白居易祭文」注釈

北 山 円 正

平安時代文学における『白氏文集』の受容は、漢詩文にとどまらず、和歌・物語・日記・随筆等々文学の諸分野に及ぶ。たとえば、一条朝頃に活躍した文人具平親王は、自作において当時の詩風詩体に触れて、「我朝詞人才子、以『白氏文集』為『規模』。故承和以来、言<sub>レ</sub>詩者皆不<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>体裁<sub>一</sub>矣」(『本朝麗藻』巻下・讃徳部、「和<sub>下</sub>高礼部再夢<sub>二</sub>唐故白大保<sub>一</sub>之作<sub>上</sub>」の「中華変雅人相慣、季葉頽風体未<sub>レ</sub>訛<sub>アヤマラ</sub>」への自注)と概観している。つまり白詩はわが国の詩人たちにとって規範であり、作品の水準を維持させる機能を果たしていたのである。「古今集」の歌人は詩中の語や詩想を和歌に持ち込むことによって、従前の歌風を一変させた。また、たんに一語を取り入れるだけではなく、作品の構想にまで白詩の内容が深くかわっている様相を、『源氏物語』からいくつも見出すことができる。大小を問わずこのようなさまざまな享受は、一時期に限られるのではなく、詩文集の伝来以来絶え間なく平安時代を通じて行われてきた。

当時『白氏文集』は多くの読者を持っていた。また、『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』にその詩文の摘句を収め、種々の文学作品や古記録に記されるように、朗誦の対象ともなっていた。このように広く人々に親しまれていたのである。やがて詩文のみにとどまらず、作者である白居易にも関心が及ぶ。都良香には「白楽天讃」(『都氏文集』巻三)があり、「情竇虚深」と人となりを評し、『白氏文集』を「集七十巻、尽是黄金」と讃えている。島田忠臣は、「吟<sub>二</sub>白舍人詩<sub>一</sub>」(『田氏家集』巻之中)において、常住坐臥白詩を賞讃すると述べ、居易の子と同年の生まれであることを根拠に、「付<sub>二</sub>於文集<sub>一</sub>海東来」つまり自分は『白氏文集』とともに日本にやってきたのだとまで言う。高階積善は再度にわたって白居易を夢に見て敬慕を詩に詠み、やがて先の具平親王や藤原為時の唱和にまで到る。詩人らの寄せる思いの一端を垣間見ることができよう。為時は詩中の「風姿未<sub>下</sub>与<sub>二</sub>影図<sub>一</sub>訛<sub>上</sub>」に注して「我朝慕<sub>二</sub>居易風跡<sub>一</sub>者、多<sub>二</sub>図<sub>一</sub>屏風。故云」と述べ、居易の図像が数多く生まれたことを伝えている。良香の「白楽天讃」も楽天像に寄せられたものと思われる。絵と言えば、日本でも行われた尚齒会には、白居易を含む七老を描いた屏風が飾られた。この会を催すのは、創始者居易への敬意共鳴の現れである。

こういった白居易個人への平安時代の興味関心をとどめる事例は枚挙に遑なく、研究の手は広範囲に及んでいるが、考察の対象とすべき資料はまだ残されている。本稿では、これまで十分に読み解かれていなかった平安末期の藤原敦光「白居易祭文」（『本朝統文粹』巻十二）を取り上げて訓み、文人たちがいかなる思いを寄せていたのかを知るよすがとしたい。

祭文の本文は、内閣文庫蔵『本朝統文粹』（複製本、山岸徳平解説）所収のそれを用い、蓬左文庫蔵本によって適宜校訂した。まず全文を句読点を付して掲げる。本文の対偶を明らかにする便宜のため、該当部分を二行書きにしてその頭に括弧を施した。＊は校訂した部分であり、その理由は語注において述べる。祭文を①から④の段落に区分し、段落ごとに訓みを示し、語注を記して主な用例を挙げた上で大意をまとめる。

白居易祭文

敦光朝臣

① 維保延四年、歲次戊午、二月丁巳朔十日丙寅、兵部大輔正五位下兼行參河守藤原朝臣顯長、謹以清酌庶羞之奠、敬祭于大唐贈右僕射白樂天之靈、

② 惟公 天地淳粹、德輝之照世也、台彩早入孕、誠是 一代之詩伯、  
嶽瀆精神、詞華之軼人也、風騷更比高、万葉之文匠也。

③ 夫 合志則殊方之客自親、幽玄之境、遙雖閑蹤、縱遊大原之故郷、魂而有靈、享斯薄奠、  
慕義則異代之交無隔、後素之功、新以図像、縱往靈山之淨土、

④ 嗟呼 昔在平生、辞人才子、窃其華藻、彼一時也、伏乞 鑑此露胆之佳趣、  
今臨祭奠、末学頑質、慕其文章、此一時也、授以風骨之英材、尚饗。

（『本朝統文粹』巻十二・祭文）

白居易祭文

敦光朝臣

① 維保延四年、歲次戊午に次る、二月丁巳の朔十日丙寅、兵部大輔正五位下兼行參河守藤原朝臣顯長、謹しみて清酌庶羞の奠を以て、敬しみて大唐贈右僕射白樂天之靈を祭る。

や死者の靈を祭り弔い、祈願する儀式などにおいて読誦する文章。

按祭文者、祭三奠親友之辞也。古之祭祀、止於告饗而已。中世以還、兼讚三言行以寓哀傷之意。蓋祝文之变也（『文体明辨』巻之六十一・祭文）

「白居易」は、中唐の詩人（七七二・八四六）。「祭文」は、天神地祇

と、「親友」を祭る場合に限定して捉える見解もあるが、多くの例によって明らかなように、祭文を捧げる対象は多岐わたる。本祭文のように、

景仰する先人を祭って祈願する時に作成することもある。「白居易祭文」という題は、題の形態としては異例であり、中国ではまず見ない。……

祭文」のように記すのは、藤原敦宗「北斗御修法祭文」（『朝野群載』巻三・『卅五文集』。この祭文の作者が敦宗であることは、柳澤良一「『卅五文集』（拾遺・覚書）（『国書逸文研究』第十四号）によって明らかにされた）・大江匡房「歌合祭文」（『朝野群載』巻三）などと、平安時代には見られる。しかし、通常、

晉庾亮「積奠祭孔子文」、梁元帝「積奠祭顔子文」（『藝文類聚』巻三十八・礼部上・積奠）

唐太宗「祭北岳恆山文」（『初学記』巻五・地部上・恆山）

「祭城山神文」（『菅家文章』巻七）

と記されることの方が多い。この題は、「祭白居易文」とあるべきかもしれないが、当時の同類の例に徴して今はこれでよいと考えておく。

「敦光朝臣」は、藤原敦光（一〇六三——一一四四）。平安時代後期の文人・学者。敦光の伝記については、大曾根章介「院政期の一鴻儒・藤原敦光の生涯」（『日本漢文学論集』第二巻所収）参照。

「維」は、発語の助字。「惟」に同じ。祭文の冒頭はほとんどこの語で始まる。観智院本『類聚名義抄』（法中）の訓に「コレ」がある。「歳次戊子」の「歳次」は、歳星（木星）が宿ること、とし廻り意。木星の位置する星宿によって年の干支を示した。

歳次「天紀」、月旅「太簇」（『文選』巻五十六、陸佐公「石闕銘」）

藤原敦光「白居易祭文」注釈

「和銅四年、歳次辛亥、河辺宮人、姫嶋松原、見嬢子屍、悲嘆作歌二首」（『萬葉集』巻二・二二八題詞）

帝姫阿倍天皇御世之天平神護元年、歳次乙巳（年始）（『日本靈異記』巻下・第三十八縁）

「保延四年（一一三八）は「戊午」に当たる。底本及び蓬左文庫本には「戊子」とあるが、「保安四年」の干支ではないので「戊午」に改めた。「子」は、事態の相似による誤写であろう。観智院本『類聚名義抄』（僧中）には「次」の訓に「ヤトル」がある。「丁巳」は、「二月」の「朔」の干支を示している。「朔」は、ついたち。

「兵部大輔」は、兵部省（二十巻本『和名類聚抄』巻五・職官部に、「兵部省 都波毛乃々都加佐」とある）の卿に次ぐ二等官。

卿一人 掌内外武官名帳、考課、選叙、位記、兵士以上名帳、朝集、祿賜、假使、差、発兵士、兵器、儀仗、城隍、烽火事、大

輔一人（『令義解』巻一・職員令）

「兼」は、兼官していることをいう。数官を兼任する場合、位階に相当する官職を「正」、それ以外は「兼」とした。この藤原頭長は、「兵部大輔」が正官、「参河守」が兼官。

凡任「兩官以上者、一為正。余皆為兼」（『令義解』巻四・選叙令）  
大学頭従五位下兼行肥後介菅原朝臣清人一首

……

正三位行中納言兼右近衛大将東宮大夫良峯朝臣安世一首（『経国集』

巻第一目録）

「行」は、位階が高く官職が低いことを示す語。官の相当位が本人の位より低ければ行、その反対は守。

凡任内外文武官、而本位有高下者、若職事卑為行。高為守  
（『令義解』卷四・選叙令）

從五位上行式部少輔首原朝臣清公……從四位下行播磨守臣賀陽朝臣  
豐年（『凌雲集』序）

「藤原朝臣頭長」（一一一七—一一六七）は、藤原頭隆の三男。七歳の保安四（一一三三）年に叙爵。その後数々の国守を歴任して、保元三（一一五八）年四月に蔵人頭、八月に参議に任じられている。極官は権中納言。「参河守」に任じられたのは保延二年十二月。頭長の文事はほとんど知られていないが、『新古今和歌集』に一首入集している。「謹」は、謹嚴な態度、恭しさを示す語。「清酌」は、清酒。「庶羞」は、さまざまな御馳走。「奠」は、供え物。「敬」は、うやまいつつしむ姿勢を表した語。「大唐」は、唐の美称。書名に『大唐西域記』『大唐開元礼』がある。

南贍部洲大唐国東都香山寺居士太原人白楽天（『白氏文集』卷七十・3606、「画」弥勒上生幀記）

天平年中、拜入唐判官、到大唐見天子（『懷風藻』、积并正伝）  
大唐凋弊、載之具矣（『菅家文章』卷九、「請」令諸公卿議定遣唐使進止一状）

「贈右僕射」は、白居易の歿後に贈られた官職。「贈」は、追贈の意。「僕射」は、尚書省の次官。唐の時代、尚書省の長官である尚書令は任

命されなかったため、尚書僕射が宰相の地位にあった。

会昌初、以刑部尚書致仕。六年卒。年七十五、贈尚書右僕射  
（『新唐書』卷一九・白居易伝）

「白楽天」の「楽天」は、「白居易」の字。本祭文のみならず、いずれの祭文もその内容だけではなく、文体もまた同類の形態を持っている。

「白居易祭文」のように、「維」で始まり、年月日、供物の捧呈者（願主）、そして「謹以……之奠」「敬祭……之靈」と続いていくのは、どの祭文ともほぼ変わらない。

維宋孝建三年、九月癸丑朔十九日辛未、王君以山羞野酌、敬祭  
顏君之靈（『文選』卷六十、王僧達「祭顏光祿文」）

維垂拱二年、太歳景戌正月壬寅朔二十二日癸亥、長史劉某、謹以  
清酌庶羞之奠、敬祭陸明府之靈（『楊炯集』卷十、「為梓州官属、祭陸鄭県文」）

維大唐上元二年、歲次乙亥、八月壬申朔十六日丁巳、交州交趾県令等、謹以清酌之奠、敬祭漢高皇帝之靈（『唐鈔本「王勃集」』卷三十、「過淮陰、謁漢祖廟祭文。奉命作」）

維元和二年、歲次戊子、八月辛亥朔十九日己巳、將仕郎守左拾遺翰林學士太原白居易、謹以清酌庶羞之奠、敬祭陳氏楊夫人之靈  
（『白氏文集』卷二十三・147、「祭楊夫人文」）

維貞觀七年、歲次乙酉、九月甲子朔二十五日戊子、前進士菅某、奉家君教、以醴粟之奠、致祭于連聰靈（『菅家文章』卷七、「祭連聰靈文」）

維天延三年乙亥之歲、八月十三日壬子、吉日良辰、左大臣從二位源朝臣兼明、謹以「香花之薦」、敬祭「龜山之神」(「本朝文粹」卷十三、兼明親王「祭「龜山神」文」)

(現代語訳)

ここに保延四年、歳は戊午の星宿に宿る、二月丁巳朔の十日丙寅に、兵部大輔正五位下兼行参河守藤原朝臣顯長は、謹んで清酒ともるもの御馳走の供物によって、敬って大唐の贈右僕射白楽天の霊を祭る。

(2) 惟るに公は天地の淳粹あり、嶽瀆の精神あり。徳輝の世を照らすや、台彩早に孕に入り、詞華の人に軼ぐるや、風騷更に高きを比ぶ。誠は是れ一代の詩伯、万葉の文匠なり。

白居易の心の広さや徳の高さを讃えるとともに、詩の師匠と呼ぶ。「惟」は、この文脈では、「維」に同じく発語の助字として「これ」と訓むことも、「おもひみるに」と訓むことも可能である。今は後者による。「公」は敬称。白居易に対してこう言う。

惟公弘大温恭……惟公積勤(「韓昌黎全集」卷二十三、「祭「馬僕射」文」)

惟公尼山降彩、斯誕「将聖」(「家伝」・「武智麻呂伝」。これは、大学寮で行われた釈奠における祭文の一節。この本文については、拙稿「武智麻呂伝の「釈奠文」・本文批判と「王勃集」受容」、

藤原敦光「白居易祭文」注釈

「風土記研究」第二十五号参照)

「天地淳粹」は、天地の間における純粹な心。

非「醇粹之方壯」、謀「踏駁於王義」(「文選」卷六、左太冲「魏都賦」。劉淵林注「班固云、不変日「醇」、不雜日「粹」。李善注「楚辞日、玉色類以「晚」顔。精純粹而始壯」)

鏡「純粹之至精」、聆「清和之正声」(「文選」卷四十八、楊子雲「劇秦美新」)

「嶽瀆精神」は、山や河のような広い心。「嶽瀆」は、

秦嶺九峻、涇渭之川、曷若「四瀆五嶽、帶河沂洛、圖書之淵」(「文選」卷一、班孟堅「東都賦」。李善注「爾雅日、江河淮濟、為「四瀆」。又日、泰山為「東岳」、霍山為「南岳」、華山為「西岳」、恒山為「北岳」、嵩山為「中岳」)

と、李善注の言うように四河五岳のこと。白居易の人格性を述べるこの二句は、

徵士陳君、稟「嶽瀆之精」、苞「靈曜之純」(「文選」卷五十八、蔡伯喈「陳太丘碑文」。李善注「孝經援神契日、五嶽之精雄聖、四瀆之精仁明。又鈎命決日、五嶽吐「精」。宋均日、吐「精」生「聖」人也。靈曜謂「天也」。尚書緯、有「三考靈曜」。五臣注「孝經援神契日、五岳之精雄聖、四瀆之精仁明。故以比之也。靈曜謂「天地」也。純和也」)の本文及び注に基づいている。「嶽瀆」には次の例もある。

人靈昭「有作之期」、嶽瀆降「非常之表」(「王子安集」卷十五「益州夫子廟碑」序)

君鷹<sup>ニ</sup>岳瀆<sup>ニ</sup>之秀、挺<sup>ニ</sup>風雲<sup>ニ</sup>之会<sup>ニ</sup>（同卷十六、「益州縣竹県武都山淨惠寺碑」序）

「德輝」は、徳の輝き、徳の光。「徳」は、白居易の徳。

鳳凰翔<sup>ニ</sup>于千仞<sup>ニ</sup>兮、覽<sup>ニ</sup>德輝<sup>ニ</sup>而下<sup>レ</sup>之（『文選』卷六十、賈誼「弔屈原」文。李善注「礼記曰、德輝動<sup>ニ</sup>於内<sup>ニ</sup>」）

王沢<sup>ニ</sup>之及<sup>ニ</sup>四海<sup>ニ</sup>也、性水澄兮幽咽絶、德輝<sup>ニ</sup>之滯<sup>ニ</sup>一隅<sup>ニ</sup>也、情竇暗兮怨曠生（『扶桑集』卷九、菅原文時「仲春積奠、毛詩講後、賦詩者志之所<sup>レ</sup>之」詩序。「本朝文粹」卷九）

「照<sup>レ</sup>世」は、徳の光輝が世を照らすことを言う。

直氣充<sup>ニ</sup>朝星宿聚<sup>ニ</sup>、德輝照<sup>レ</sup>世日居明（『本朝麗藻』卷下・書籍部、具平親王「奉<sup>ニ</sup>読<sup>ニ</sup>重押<sup>ニ</sup>情字<sup>ニ</sup>御製<sup>ニ</sup>不堪<sup>ニ</sup>并舞<sup>ニ</sup>敬押<sup>ニ</sup>本韻<sup>ニ</sup>」）  
浴<sup>ニ</sup>惠沢<sup>ニ</sup>而済<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>、傳説<sup>ニ</sup>之舟自閑<sup>ニ</sup>、播<sup>ニ</sup>德輝<sup>ニ</sup>而照<sup>レ</sup>世、魏徴之鏡能瑩（『本朝統文粹』卷十三、藤原明衡「奉<sup>ニ</sup>為亡考小野宮右大臣<sup>ニ</sup>卅九日追善<sup>ニ</sup>願文<sup>ニ</sup>」）

靈跡長垂年二百、德輝普照界三千（『本朝無題詩』卷十、釈蓮禪「冬日参詣安樂寺聖廟」）

など、同様の例が多い。また、

……我がおもと生まれたまはんとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす……（『源氏物語』・若菜上、明石の入道の明石の御方への消息）

世を照らす月隠れにしさ夜中はあはれ闇にやみなまどひけん（『後

拾遺和歌集』卷二十・釈教・一一八二、伊勢大輔「釈尊の入滅を詠む」）

も、同類に数えてよいだろう。この句は、徳の輝きがこの世を照らすうとしてと解しておく。つづいて白居易の出生が述べられる。「台彩」は、他に例を見ず難解である。「台」は、前句「輝」との関連からして、光を放つ何かを想定してよいのではないだろうか。そこで思い至るのは、「三台」である。

三台<sup>ノベ</sup>摘<sup>レ</sup>朗<sup>ヒカリヲ</sup>、四岳<sup>サガシキヲ</sup>増<sup>レ</sup>峻<sup>ナガラフ</sup>（『文選』卷二十五、盧子諒「贈<sup>ニ</sup>劉琨<sup>ニ</sup>」）。李善注「漢書曰、北斗魁<sup>ニ</sup>下六星<sup>ニ</sup>兩兩<sup>ニ</sup>而比<sup>ニ</sup>曰<sup>ニ</sup>三能<sup>ニ</sup>色<sup>ニ</sup>齊<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>和<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>齊<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>乖<sup>ニ</sup>。說文曰、摘<sup>ハ</sup>舒也。尚書、帝曰、咨<sup>アツ</sup>四岳。春秋漢含孳曰、三公象<sup>ニ</sup>五岳<sup>ニ</sup>、在<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>法<sup>ニ</sup>三能<sup>ニ</sup>。台<sup>ハ</sup>与<sup>レ</sup>能同也。五臣注「三台星名也。其色齊明、則君臣和。四岳諸侯也。峻<sup>ハ</sup>高也」）

三台<sup>タテ</sup>樹<sup>レ</sup>位<sup>ツチ</sup>、履<sup>レ</sup>道<sup>アツマル</sup>是鍾<sup>ニ</sup>（『文選』卷五十六、曹子建「王仲宣誄」）  
この語は、北斗七星の下方に並ぶ、二星で一組をなす三組の星の名。大尉・司徒・司空の三公になぞらえる。前者の例では、三組の星の縁で三公の「朗」を導く。「彩」は、ここでは光彩・光輝の意に解するべきであらう。

日下<sup>レ</sup>壁而沈<sup>レ</sup>彩<sup>ニ</sup>、月上<sup>レ</sup>軒而飛<sup>レ</sup>光<sup>ニ</sup>（『文選』卷十六、江文通「別賦」）  
如<sup>ニ</sup>彼隨和<sup>ニ</sup>、発<sup>レ</sup>彩流<sup>レ</sup>潤<sup>ニ</sup>（同卷五十七、潘安仁「夏侯常侍誄」）  
尼山降<sup>レ</sup>彩<sup>ニ</sup>、泗浜騰<sup>レ</sup>氣<sup>ニ</sup>（『王子安集』卷十五、「益州夫子廟碑」）  
したがって、「台彩」は三台の放つ光あるいは星の輝きということになる。このように傑出した人物偉大な先人は、しばしば光輝に喩えられる。



不<sup>オハイシテ</sup>二 大徳<sup>ヒキナ</sup>以宏覆、援<sup>ヒキナ</sup>日月而齊暉（『文選』卷六十、陸士衡「弔魏武帝文」）

日月在<sup>レ</sup>躬、隱<sup>レ</sup>之弥曜（同卷四十七、袁彦伯「三国名臣序贊」）

明均<sup>二</sup>兩曜、不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>遷<sup>二</sup>代謝之期<sup>一</sup>（『王子安集』卷十五、「益州夫子廟碑」序、清蔣清翊「王子安集註」、初學記一、纂要云、日月謂<sup>二</sup>之兩曜<sup>一</sup>。「夫子」は孔子）

これらと同様、白居易もまた光彩に喩えられたと見たい。次に挙げる例も同じと考えてよからう。

庶<sup>コヒネガハクハ</sup>使<sup>二</sup>黃閣之辺、威風添<sup>レ</sup>氣、紫宮之下、台曜増<sup>レ</sup>光（『三代美錄』元慶二年七月十七日、藤原基経への加階の詔勅）

尊<sup>レ</sup>師崇<sup>レ</sup>礼詎登攀、台曜尋来泗水間（『雜言奉和』、藤原春海「秋日陪<sup>二</sup>左丞相城南水石亭、祝<sup>二</sup>蔵外史大夫七旬之秋、応<sup>レ</sup>教<sup>一</sup>」。「左丞相」は、藤原時平。「蔵外史大夫」は、大蔵善行）

扶<sup>レ</sup>身藜杖隨<sup>二</sup>三徑、慕<sup>レ</sup>徳台星仰<sup>二</sup>九霄<sup>一</sup>（同、大蔵善行「秋日陪<sup>二</sup>左丞相城南水石亭、賜<sup>二</sup>恩祝、応<sup>レ</sup>教一首<sup>一</sup>」ノ二）

変風詠<sup>レ</sup>徳、詩人歌而到<sup>レ</sup>今、台星比<sup>レ</sup>輝、良吏載而鑑<sup>レ</sup>古（『本朝文粹』巻五、大江朝綱「為<sup>二</sup>清慎公、辞<sup>二</sup>右大臣<sup>一</sup>第二表」）

以上のように、この祭文に見られる白居易への尊崇も勘案して、「台彩」なる語を三台にも喩えるべき光と捉えてみたのであるが、あくまでも試解にとどまる。妥当な解釈を得るべく後考を期したい。「入<sup>レ</sup>孕」は、三台の光輝が天空から下って、白居易が母の胎内に宿ったという。「孕」は、本来ははらむの意であるが、ここは腹と同意と見てよいだろう。誕

生に当たって特異な事情が語られるのは、中国では稀ではない。

崧<sup>スガク</sup>高維嶽、駿極<sup>二</sup>于天<sup>一</sup>、維嶽降<sup>レ</sup>神、生<sup>二</sup>甫及申<sup>一</sup>、維申及甫、維周之翰（『毛詩』・大雅・蕩之什・「崧高」。毛伝「崧高貌。山大而高曰崧。嶽四嶽也。……駿大、極至也。嶽降<sup>二</sup>神靈和氣<sup>一</sup>、以生<sup>二</sup>申甫之大功<sup>一</sup>……翰<sup>ハ</sup>申也。鄭箋「申申伯也。甫甫侯也。皆以賢知<sup>二</sup>入、為<sup>二</sup>周之楨幹之臣<sup>一</sup>」）

これは、四嶽が神靈を「降」して、周王朝の功臣である申伯と甫侯が生まれたと詠んでいる。また、

伯夏生<sup>二</sup>叔梁紇<sup>一</sup>。紇与<sup>二</sup>顔氏女<sup>一</sup>、野合而生<sup>二</sup>孔子<sup>一</sup>。禱<sup>二</sup>於尼丘<sup>一</sup>得<sup>二</sup>孔子<sup>一</sup>（『史記』卷四十七・孔子世家）

と、叔梁紇と顔氏の女が尼丘山に祈った結果、聖人孔子が山岳の力によつて生まれたと記している。四嶽・尼丘山という、ともに高所からもたらされる神奇な力によつて、類い希な人物が生誕すると語られる点では、天上の輝きが胎内に宿つて地上に現れたとされる白居易と共通する。『本朝麗藻』（巻下・讃徳部）高階積善「夢中同謁<sup>二</sup>白大保元相公<sup>一</sup>」の「高情不<sup>レ</sup>識又何神」に対する自注には、

白太保伝云、大保者是文曲星神。而相公未<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>其所<sup>一</sup>伝矣。

とあつて、「文曲星神」とされている。『政事要略』（巻六十一・糾弾雜事）には、

白居易伝云、白居易、字樂天、太原人也。或言、其先秦將武安君白起後也。父欽通建<sup>二</sup>三三<sup>一</sup>、兼解<sup>二</sup>文章<sup>一</sup>。媵妾梁氏女、合昏之後、未<sup>レ</sup>幾有<sup>レ</sup>娠。先是梁氏夢、与<sup>二</sup>二大夫<sup>一</sup>、対語親昵、共翫<sup>二</sup>筆墨<sup>一</sup>。語曰、

我是天帝之孫也。感渠神慧、來作配足。今降文星、擬為児息。梁氏既而懷孕……或曰、古則宝応菩薩下池世間。号曰伏犧……今時文殊師利菩薩為樂天。又曰、歳星為曼倩。文曲星為樂天焉。

とあり、「天帝之孫」が「文星」から下って母梁氏が孕んだと記している。末尾には、「文曲星」は「樂天」であるともいう。妊娠にまつわる同様の伝は、「普通唱導集」(巻中末)にもある。さらに、源通親の「擬香山模草堂記」(成實堂文庫本「作文大体」所引)では、

白氏將案彰、文星化入夢。惕覺感靈威、肅潔供茶菓。小年讀白樂天之伝、其身為文曲星之化。今又憶夢中之子細、弥抽掌上之丁寧。「文星化入夢」は、文曲星が通親の夢に現れたことを言う。「供茶菓」は、通親が城南につくった草堂で白居易を祭る儀式を行ったこと。「白樂天之伝」は、『政事要略』所引のそれと同じものである。

と、白居易が文曲星の化身であることを踏まえている。三台と文曲星との違いはあるものの、どちらも天空の星の靈妙な力がその誕生の背景にあったことを伝えている。この祭文「入孕」については三台による懷孕があつたのである。「詞華」は、言葉のあや、文藻、花のよつな詩歌用例は、鈴木徳男・北山「後拾遺和歌抄目錄序」注(「相愛女子短期大学研究論集」第四十巻)、「和歌現在書目錄」真名序注(同第四十四巻)、「柿本人麿影供注釈」(同第四十六巻)参照。「軼人」は、他の人よりもすぐれていること。白居易の詩文が秀逸であることを言う。「類

聚名義抄」(僧中)の「軼」の訓には「スク」がある。

妖艶軼人、足驚目矣(『雲州往来』巻下末)

稟鳳池之余浪、故文藻之美譽軼人、伝龍岫之遺風、故材花之芳名被世(『詩序集』下、藤原明衡「秋夜侍源亞相淳風坊水閣守」庚申、同賦「月光依水明、応教」)

「風騷」は、詩文、文学の意。例は次に示すもの以外は、鈴木・北山「藤原敦隆「和歌類林序」注」(「相愛女子短期大学研究論集」第四十三巻)参照。

朱絃弘宮徵、洪筆振風騷(『白氏文集』巻六十七・3333、「寄献北都留守裴令公」)

「比高」は、白居易が高度な作品を連ねたことを言うのである。用例未見。

「一代」は、当代、その時代、その活躍していた頃。

土生一代間、誰不有浮沈(『白氏文集』巻二・0095、「読史詩五首」ノ二)

一代儒宗君第一、于今吾輩仰高山(『扶桑集』巻九、紀長谷雄「北堂史記竟宴、各詠史、得叔孫通」)

「詩伯」は、詩の大家、詩豪。「伯」は、かしら、長。

平公今詩伯、秀発吾所羨(盛唐杜甫「石研詩」)

莫道登科遲速事、以詩為伯義為兄(菅家文章「卷一、<sup>イフコト</sup>和春十一兄老生吟見寄」)

詩伯歌仙、十有余輩(『扶桑古文集』、藤原敦基「春日同詠花樹久



芳、心教倭歌。『本朝小序集』

「万葉」は、万代、永遠の意。

拓世貽統、固萬葉而為量（『文選』卷四十六、顔延年「三月三日曲水詩序」李善注「晉中興書、詔桓玄曰、蕃衛王家、垂固萬葉」。五臣注「葉代也……言、広世葉以遺後緒、使堅萬代而成乎大道上也」）

冷泉院者、万葉之仙宮、百花之一洞也（『本朝文粹』卷十、菅原文時「暮春侍宴冷泉院池亭、同賦「花光水上浮、心製」詩序」）

「文匠」は、詩文の師匠。

若名工文匠、商略詆訶、蕪詞拙迹、於是乃見（『貞觀政要』卷二・求諫）

楽天を師と見なすのには、

唐白居易、為異代之師、以下長詩句「歸仏法」也（『本朝文粹』卷

十二、慶滋保胤「池亭記」）

がある。この対をなす二句は、白居易を、生前は詩の棟梁、歿後は永遠の師と崇める。

#### （現代語訳）

思うに公は天地の間における純粹な心、山や河のような広い心を持っておられる。その徳の光がこの世を照らすために、三台の星の輝きがつとに母の胎内に入り込んだのである、文彩は人よりも勝り、詩文においてすぐれた作品を書き連ねられた。まさにその時代の詩の大家であり、永

遠の詩文の師匠であられる。

(3) 夫れ志 を合はすれば則ち殊方の客も自づから親し、義を慕へば則ち異代の交はりも隔てなし。幽玄の境、遙かに蹤を閉つと雖も、後素の功、新たに以て像を図けり。縦ひ大原の故郷に遊ぶとも、縦ひ靈山の淨土に往くとも、魂にして靈あらば、斯の薄奠を享けよ。

国と時代の違いを越えて、我が思いを供物に託して伝えようとする。

「夫」以下の二句は、次の詩序を踏まえているであらう。

夫交者無隔古今、不限老少。志合則千載旦暮於懷抱之間、道存則一言膠漆於筆硯之下……蕭会稽之過古廟、託締異代之交、張僕射之重新才、推為忘年之友」（『本朝文粹』卷十、大江朝綱「晚春陪上州大王臨水閣、同賦「香乱花難識、心教」詩序」）

「夫」は、発語の助字。道理や一般論などを説くときに、その箇所の冒頭に置く。

夫水所以載舟、亦所以覆舟（『文選』卷三、張平子「東京賦」）  
「合志」は、相手の思いや行いが自分の志になつこと。「志」は詩文に対する思い。

所以下去三國死而君者、行合於志、而慕義無窮也（『文選』卷三十九、鄒陽「獄中上書自明」）  
苦嗜独題如合志、緩吟自聽便知音（『本朝麗藻』卷下・詩部、藤原為時「春日同賦「閑居唯友」詩」）

多年合志、通霄嗜<sub>レ</sub>学（『詩序集』下、藤原尹通「冬夜於<sub>二</sub>藤二千石文亭、同賦<sub>三</sub>夜深聞<sub>二</sub>遠雁<sub>一</sub>詩」）

「殊方」は、外国、異国。

殊方異類、至<sub>二</sub>于<sub>二</sub>萬里<sub>一</sub>（『文選』卷一、班孟堅「西都賦」）

殊方我漂泊、旧里君幽独（『白氏文集』卷十・0509、「孟夏思<sub>二</sub>渭村旧居<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>舍弟<sub>一</sub>」）

随<sub>レ</sub>風草靡殊方狎、就<sub>レ</sub>日葵傾遠俗歸（『扶桑集』卷七、藤原雅量

「遼東丹裴大使公、去春述<sub>レ</sub>懷、見<sub>レ</sub>寄<sub>二</sub>於余、勘問之間、遂無<sub>レ</sub>和之。此夏綴<sub>二</sub>言志之詩、披<sub>二</sub>与得意之人、不<sub>レ</sub>耐<sub>二</sub>握玩、偷押<sub>二</sub>本韻<sub>一</sub>」

「自親」は、いつの間にか親しみをおぼえるの意。一般論であるとともに白居易に親近感を抱くことでもある。

其所<sub>二</sub>以相遇<sub>一</sub>也、不<sub>レ</sub>求而自合。其所<sub>二</sub>以相親<sub>一</sub>也、不<sub>レ</sub>介而自親

（『文選』卷五十三、李蕭遠「運命論」）

性淡<sub>レ</sub>不變、更沈<sub>二</sub>思於在藻之鱗<sub>一</sub>、心虚自親、兼結<sub>二</sub>契於棲沙之鶴<sub>一</sub>

（『江吏部集』卷上、「夏日陪<sub>二</sub>藤垂相城北山莊<sub>一</sub>、同賦<sub>二</sub>淡交唯對<sub>二</sub>水詩<sub>一</sub>」序）

「慕<sub>レ</sub>義」は、真の意義を慕<sub>二</sub>つこと<sub>一</sub>。「義」は、白居易の文学における

それ。例は、「合<sub>レ</sub>志」で挙げた鄒陽の「獄中上<sub>二</sub>書自明<sub>一</sub>」のほか、次がある。

ある。

遠方異俗之人、嚮<sub>レ</sub>風慕<sub>レ</sub>義（『文選』卷五十一、東方曼倩「非有先

生論」）

出<sub>二</sub>壞窓<sub>一</sub>以慕<sub>レ</sub>義、顧<sub>二</sub>残涯<sub>一</sub>以祈<sub>レ</sub>恩（『本朝麗藻』卷下、高階積善

「九月尽日、侍<sub>二</sub>北野廟、各分<sub>二</sub>一字<sub>一</sub>詩」序。『本朝文粹』卷十）

「異代」は、時代を異にすること。

素文信而底<sub>レ</sub>麟令、漢寶<sub>二</sub>祚于異代<sub>一</sub>（『文選』卷十四、班孟堅「幽

通賦」）

夫漢文皇帝、為<sub>二</sub>異代之主<sub>一</sub>、以下<sub>二</sub>好<sub>二</sub>儉約<sub>一</sub>安<sub>二</sub>人民<sub>一</sub>也。唐白樂天、

為<sub>二</sub>異代之師<sub>一</sub>、以下<sub>二</sub>長<sub>二</sub>詩句<sub>一</sub>歸<sub>二</sub>仏法<sub>一</sub>也。晉朝七賢、為<sub>二</sub>異代之友<sub>一</sub>、

以<sub>二</sub>身在<sub>二</sub>朝志在<sub>二</sub>隱也<sub>一</sub>（『本朝文粹』卷十二、慶滋保胤「池亭記」）

「無<sub>レ</sub>隔」は、へだての無いことを言<sub>二</sub>つ<sub>一</sub>。白居易とは時代を異にするが、その詩文の心を敬慕するのであれば、交流には隔たりはないという。

肺腑都無<sub>レ</sub>隔、形骸固不<sub>レ</sub>羈（『白氏文集』卷十三・0608、「代<sub>二</sub>書詩

一百韻寄<sub>二</sub>微之<sub>一</sub>」）

白居易は遙か遠くの幽界にあるとはいえ、絵に描いてその姿を現した

という。「幽玄」は、奥深く至りがたい美の極致。「幽玄之境」は、白居易が到達した文学の境地。なお幽冥・幽明などのあの世と解せられなく

もないが、当時の「幽玄」は死後の世界の意を持たないために取らない。

古今相隔、幽玄惟同（『本朝統文粹』卷八、大江匡房「秋日陪<sub>二</sub>安

樂寺聖廟、同賦<sub>二</sub>神德契<sub>二</sub>遐年<sub>一</sub>詩」序）

依<sub>レ</sub>重<sub>二</sub>幽玄之古篇<sub>一</sub>、方伝<sub>二</sub>後素之新様<sub>一</sub>（『朝野群載』卷一、藤原敦

光「柿本朝臣人麿画讃」序。『本朝統文粹』卷十一）

後者は、対をなす「幽玄・後素」の例。他の例は、鈴木・北山「和歌現在書目録 真名序注」（「相愛女子短期大学研究論集」第四十四巻）・

「柿本人麿影供注釈」（同第四十六巻）参照。「遙雖<sub>レ</sub>閑蹤」は、白居易

の極めた境地への道が閉ざされており、後進には到り得ないという。

列真之所<sub>レ</sub>宅、跡閉<sub>二</sub>不死之区<sub>一</sub>、群仙之所<sub>レ</sub>都、路人<sub>二</sub>無人之境<sub>一</sub>

（『本朝文粹』巻三、都良香「神仙」対策文、『都氏文集』巻五）

「後素」は、絵画、絵、『論語』（八佾篇）の「子夏問曰、巧笑倩兮、美目盼兮、素以為<sub>レ</sub>絢兮、何謂也。子曰、絵事後<sub>レ</sub>素」による語。絵を描く仕上げに「素」（白）加えるからだという。この「後素」は、白居易の肖像画。

容鬢皆顛<sub>二</sub>於後素<sub>一</sub>、詞句足<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其中丹<sub>一</sub>（『本朝文粹』巻九、菅原文時「暮春藤垂相山庄尚齒會詩」序）

期日已近、後素之態、殆可<sub>二</sub>闕如<sub>一</sub>（『雲州往來』上本）

「新以図<sub>レ</sub>像」は、藤原顕長がこの儀式を催すために、旧来のものを用いたのではなく、あらたに絵を描かせたことをいう。

美<sub>レ</sub>終則誅<sub>レ</sub>、図<sub>レ</sub>像則讀<sub>レ</sub>興（『文選』序）

身自精勤、講<sub>レ</sub>経図<sub>レ</sub>像、十之三四（『本朝文粹』巻十二、具平親王

「普賢菩薩讚」序）

白居易を敬慕してその姿を描くのは、『本朝麗藻』（巻下）藤原為時「和<sub>二</sub>高礼部再夢<sub>一</sub>唐故白大保之作」の「風姿未<sub>二</sub>与<sub>一</sub>影図<sub>一</sub>訛」への自注、「我朝慕<sub>二</sub>居易風跡<sub>一</sub>者、多図<sub>二</sub>屏風<sub>一</sub>。故云」によってよく知られている。『都氏文集』（巻三）の「白樂天讚」は、白居易の画像のために書かれた讚だという（金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集・道真の文学研究篇第一冊』一〇ページ）。この祭奠の主催者藤原顕長は、白居易とは所を隔て時を異にし、境地も遠く及ばぬものの、新調した肖像画に

よって少しでも近付こうとしたのである。

「縦」は、たとえ…ともの意。「縦…縦…」で「魂而有<sub>レ</sub>靈」以下の二句を導く。「大原之故郷」は、太原（山西省太原市。「大」は「太」とも記す）が白居易の故郷であることをいうが、

大曆六年正月二十日、生<sub>二</sub>鄭州新鄭縣東郭宅<sub>一</sub>（馬元調刊本『白氏文集』巻七十一・3798、「醉吟先生墓誌銘」）

とあるように、正しくは「鄭州新鄭県」（河南省）を故郷とすべきである。祭文がこのようないうのは、白居易がしばしば自分を「太原（人）白居易（樂天）」と呼んでいるからである。

元和十一年秋、太原人白樂天（『白氏文集』巻二十六・1472、「草堂記」）

刑部尚書致仕太原白居易、年七十四（同巻七十一・3640、「胡吉鄭劉盧張等六賢、皆多<sub>二</sub>年寿<sub>一</sub>、予亦次焉。偶於<sub>二</sub>弊居<sub>一</sub>、合<sub>二</sub>成尚齒之會<sub>一</sub>。七老相顧、既醉甚歡。靜而思之、此会稀有。因成<sub>二</sub>七言六韻<sub>一</sub>以紀之、伝<sub>二</sub>好事者<sub>一</sub>）

神田本『白氏文集』（平安時代の古鈔本）の巻頭にも「大原白居易」とある。太原との関わりについては、祖父白鏐の事状「故鞏県令白府君事状」（『白氏文集』巻二十九・1486）に白氏の世系を記すなかで明かである。秦代の白起は、大功あつて武安君に封ぜられたが、罪なくして死を賜った。始皇の代、起の功績によつてその子仲は太原に封ぜられ、子孫はその地に居住するようになった。それで「太原人」と呼ぶのである（『及<sub>二</sub>始皇<sub>一</sub>、思<sub>二</sub>武安之功<sub>一</sub>、封<sub>二</sub>其子仲於太原<sub>一</sub>。子孫因家焉。故今為<sub>二</sub>

太原人<sup>(一)</sup>。新旧の『唐書』『白居易伝』にもそれぞれ「其先蓋太原人」(『新唐書』卷一九)「太原人」(『旧唐書』卷一六六)と記している。白居易の太原への思い入れがあつて、本貫の地を名前に付したのである(白氏と太原との関わりについては、花房英樹『白居易研究』三八～四一ページ、太田次男『白楽天』二〇～二六ページ参照)。「故郷」には次の例がある。

若<sup>レ</sup>遠行客過<sup>二</sup>故郷<sup>一</sup>、恋恋不<sup>レ</sup>能去(『白氏文集』卷二十六・1472、  
「草堂記」)

欣求浄土儉相誓、生死故郷不<sup>二</sup>再過<sup>一</sup>(『本朝無題詩』卷五、藤原忠通「秋三首」ノ二)

「靈山」は、靈鷲山のこと。耆闍崛山ともいう。古代インドの摩竭陀国の都、王舎城の東北にある山。釈迦が『法華経』『無量寿経』の講説をした所として知られている。

一心欲<sup>レ</sup>見佛、不<sup>二</sup>自惜<sup>一</sup>身命、時我及衆僧、俱出<sup>二</sup>靈鷲山<sup>一</sup>(『法華経』・如来寿量品)

苦海須臾今日別、靈山畢竟後生逢(『菅家文章』卷四、「別<sup>二</sup>遠上人<sup>一</sup>」)

思<sup>二</sup>靈山<sup>一</sup>而成<sup>レ</sup>詠、契<sup>二</sup>真如<sup>一</sup>而遺<sup>レ</sup>詞(『本朝文粹』卷十一、藤原有国「讚<sup>二</sup>法華経廿八品<sup>一</sup>和歌序」)

「浄土」は、清浄な国土。浄刹ともいう。現実の世界を穢土と称するのに対していう。「浄土」は、来世浄土、浄仏国土、常寂光土の三種類に分けられる。ここでは、白居易の死後の行き先について述べていること

から、来世浄土である。当時は阿弥陀信仰が盛んになっているので、来世浄土のうち、阿弥陀仏の西方極楽世界(西方浄土)を念頭に置いている。

我浄土不<sup>レ</sup>毀、而衆見<sup>二</sup>燒尽<sup>一</sup>、憂怖諸苦惱、如<sup>レ</sup>是悉充滿(『法華経』・如来寿量品)

從<sup>レ</sup>是西方過<sup>二</sup>十萬億佛土<sup>一</sup>有<sup>二</sup>世界<sup>一</sup>。号<sup>二</sup>極樂<sup>一</sup>……其国号<sup>二</sup>浄土<sup>一</sup>。以<sup>レ</sup>無<sup>二</sup>三毒五濁業<sup>一</sup>故也(『白氏文集』卷七十・3605、「画<sup>二</sup>西方頓記<sup>一</sup>」)

迎<sup>レ</sup>持登霞先帝、増<sup>二</sup>遍周法界之威光<sup>一</sup>、撰<sup>二</sup>引過去尊靈<sup>一</sup>、開<sup>二</sup>往生浄土之因果<sup>一</sup>(『菅家文章』卷十一、「為<sup>二</sup>故尚侍家人<sup>一</sup>、七々日果<sup>二</sup>宿願<sup>一</sup>法会願文」)

白居易は西方極楽浄土に往生したかと見たのである。この「浄土」は来世の世界であり、釈迦が説法したという「靈山」にあるのではない。したがって「靈山之浄土」というのはおかしいのであるが、

弟子大日本国左大臣正二位藤原朝臣某、前白<sup>二</sup>靈山浄土釈迦尊<sup>一</sup>言(『本朝文粹』卷十三、大江匡衡「為<sup>二</sup>左大臣<sup>一</sup>、供<sup>二</sup>養浄妙寺<sup>一</sup>願文」)のように「靈山」を「浄土」と見る考えもあり、「靈山之浄土」は不当ではなかったらしい。「魂而有<sup>レ</sup>靈」は、尊靈への呼びかけのことば。

魂而有<sup>レ</sup>靈、嘉<sup>二</sup>茲龍采<sup>一</sup>(『文選』卷五十七、潘安仁「馬汧督誄」序。李善注「范曄後漢書曰、和帝追<sup>二</sup>謚梁竦<sup>一</sup>詔曰、魂而有<sup>レ</sup>靈、嘉<sup>二</sup>斯龍采<sup>一</sup>」)

惟魂而有<sup>レ</sup>靈、莫<sup>レ</sup>忘<sup>二</sup>旧知己<sup>一</sup>(『菅家後集』、「哭<sup>二</sup>奥州藤使君<sup>一</sup>」)

魂而有<sup>レ</sup>靈、受<sup>ニ</sup>此哀贈<sup>一</sup>（『本朝文粹』卷十四、大江朝綱「在原氏  
為<sup>ニ</sup>亡息員外納言、卅九日修<sup>ニ</sup>諷誦<sup>一</sup>文」）

「享<sup>ニ</sup>斯薄奠<sup>一</sup>」は、白居易にこの供え物を受けてほしいと求めている。  
「薄奠」は、粗末な供物。

敬陳<sup>ニ</sup>薄奠<sup>一</sup>、庶鑑<sup>ニ</sup>悲誠<sup>一</sup>（『白氏文集』卷二十三・147、「祭楊夫  
人」文）

敢申<sup>ニ</sup>薄奠<sup>一</sup>、庶鑑<sup>ニ</sup>微衷<sup>一</sup>（同卷六十・2933、「祭李司徒」文）

#### （現代語訳）

さてその志が我が思いに合つのなら、異国の人とでもいつのまにか親し  
くなれるのであり、その真義を慕うのなら、時代を異にする交流でも隔  
たりはないものです。あなたは幽玄の境地に到達されて、遙かかなたへ  
とその跡を閉ざしておられますが、画作の功によって、新たに肖像を描  
きました。たとえ大原にある故郷へ出かけておられようとも、たとえ靈  
鷲山の極楽浄土へ行つておられようとも、あなたの魂に神霊があるのな  
ら、このささやかな供物を受けていただきたい。

(4) 嗟乎、昔平生に在りては、辞人才子、其の華藻を窃み、今祭奠に臨  
みては、末字頑質、其の文章を慕ふ。彼れも一時なり、此れも一時  
なり。伏して乞ふらくは、此の露胆の佳趣に鑑み、授くるに風骨の  
英材を以てせむことを。尚、はくは饗けよ。

この儀式を催す趣旨である詩文の才を授けられるよう白居易にこいね  
がい、祭文を結ぶ。「嗟呼」は、感嘆の声。「嗟乎」に作る蓬左文庫本も  
同じ。

嗟乎夫子永安<sup>トトメル</sup>幽冥（『文選』卷五十六、曹子建「王仲宣誄」）

嗟呼幽霊知<sup>ニ</sup>我此志<sup>一</sup>（『本朝文粹』卷十四、大江朝綱「為<sup>ニ</sup>亡息澄  
明卅九日願文」）

「平生は、かつて、往時。白居易の生前、ありし日。

尋<sup>ニ</sup>平生於響像<sup>一</sup>、覽<sup>ニ</sup>前物<sup>一</sup>而懷之（『文選』卷十六、陸士衡「歎逝  
賦」）

迺於<sup>ニ</sup>平生之旧寢<sup>一</sup>、聊開<sup>ニ</sup>供講之梵筵<sup>一</sup>（『本朝文粹』卷十四、大江  
匡衡「為<sup>ニ</sup>右近中将源宣方卅九日願文」）

「辞人才子」の「辞人」は、詩文にすぐれた人、「才子」は、詩文の才  
を持つ人。文人墨客。

詞人才子、則名溢<sup>ニ</sup>於縹囊<sup>一</sup>、飛文染翰、則卷盈<sup>ニ</sup>乎緗帙<sup>一</sup>（『文選』  
序）

辞人才子、文体三变（同卷五十、沈休文「宋書謝靈運伝論」）

詞人才子、漸吞<sup>ニ</sup>吟詠之声<sup>一</sup>、詩境文場、已為<sup>ニ</sup>寂寞之地<sup>一</sup>（『本朝文  
粹』卷二、大江朝綱「停九日宴十月行詔」）

詞人才子、慕<sup>ニ</sup>風繼<sup>レ</sup>塵<sup>一</sup>（同卷十一、紀淑望「古今和歌序」）

「華藻」は、はなやかな文、美しい文彩。「窃<sup>ニ</sup>其華藻<sup>一</sup>」は、白居易の  
文藻を盗もうとしたことをいう。

歩光之剌、華藻繁縟（『文選』卷三十四、曹子建「七啓八首」。李善

注「藻文采也」

華藻猶存者、補其闕以加固（『菅家文章』卷七、『崇福寺縁錦宝幢記』）

「祭奠」は、祭の供え物、祭の儀式。ここでは、白居易を祭る儀式。

朝夕奠祭、太官供給（『文選』卷六十、任彦昇「齊竟陵王行狀」）

「……士女報賽、致祭奠礼……」（『本朝無題詩』卷二、菅原在良「画障子詠三首」ノ詩題）

壇場安北斗、祭奠致南謨（『本朝統文粹』卷一、藤原敦光「初冬述懷百韻」）

「末学」は、学識に乏しいこと、浅学。「頑質」とともに、儀式の主催者頭長が自分自身を卑下したことば。

若「客所」謂末学膚受、貴耳賤目者也（『文選』卷三、張平子「東京賦」。薛綜注「末学謂不経根本」）

我雖末学、聞之前典（同卷五十七、潘安仁「馬汧督誄」。李善注「莊子曰、末学古之人有之」）

「頑質」は、頑なで愚かなこと。

覽盈虚之正義、知頑素之迷惑（『文選』卷三十四、曹子建「七啓八首」。李善注「薛君韓詩章句曰、素質也。言、人但有質朴、無治人之材也」）

何以氷兕之頑質、更隔雲母之古風乎（『本朝文粹』卷五、大江朝綱「為清慎公、辞右大臣第三表」）

愚材之臨斜景、頑質之浴重恩（『本朝統文粹』卷五、藤原明衡

「請罷」參議并勘解由長官職狀）

「其文章」は、白居易の詩文。

僕少小好為文章（『文選』卷四十二、曹子建「与楊徳祖書」）

興立礼楽之中衰、弥縫文章之殆絶（『江吏部集』卷下、「暮秋陪左相府書閣、同賦寒花為客栽、応教詩」序。『本朝文粹』卷

十一）

以上三句は、白居易在世時の文人はその文藻を盗もうとし、今時私はその詩文を慕うと述べる。

「彼一時也、此一時也」の「彼」「此」は、直前の対句「昔」「今」以下を指す。昔は昔、今は今でそれぞれだの意。今昔その時々、白居易の詩文に対する接し方があるということ。

是故非子之所能備（『ツツサニル』）

選「彼一時也、此一時也」の「彼」「此」は、直前の対句「昔」「今」以下を指す。昔は昔、今は今でそれぞれだの意。今昔その時々、白居易の詩文に対する接し方があるということ。

選「彼一時也、此一時也」の「彼」「此」は、直前の対句「昔」「今」以下を指す。昔は昔、今は今でそれぞれだの意。今昔その時々、白居易の詩文に対する接し方があるということ。

彼一時也、此一時也（『選』卷四十五、東方曼倩「答客難」。李善注「孟子謂充虞曰、臣昔是伏モトヨリ秦青瑣之職、臣今亦追ツツサニル從緑蘿之身。彼一時也、此一時也（『菅家文章』卷六、「九日後朝、侍朱雀院、同賦閑居案秋

水、応太上天皇製」詩序。『本朝文粹』卷八）

後者の例は、「昔……今」の例でもあり、本祭文作成の際に参考とした

である。

「伏乞」は、うつぶせになって願ひ上げること、心から願う気持ちを表すことば。以下、祈願の趣を白居易の霊に向かつて述べる。

伏乞、尊像示以許否（『本朝文粹』卷十三、大江以言「為員外



藤納言、請修「飭美福門額字」、告弘法大師「文」

伏乞、加級如思、昇進任意（『朝野群載』卷三、「藤原顯隆都状」）

「鑑」は、みる、状況を考え合わせて判断する。『類聚名義抄』（僧上の訓には「カ、ミル・テラス」がある。

光武鑑「前事之違、存矯枉之志」（『文選』卷五十、范蔚宗「後漢書二十八將伝論」。五臣注「鑑視也」。慶安版の訓「カ、ミ」）

敢申「薄奠、庶鑑微衷」（『白氏文集』卷六十・2933、「祭李司徒文」）

王事靡盬<sup>モロキコト</sup>、盍鑑<sup>カミ</sup>於此。尚<sup>コヒネガハクハツケヨ</sup>（『本朝文粹』卷十三、「為員外藤納言、請修「飭美福門額字」、告弘法大師「文」」）

員外藤納言、請修「飭美福門額字」、告弘法大師「文」

「露胆」は、思いのままを述べること、心の底から。次のもの以外の例は、鈴木・北山「和歌現在書目録 真名序注」（「相愛女子短期大学研究論集」第四十四巻）参照。

風聞弊破、露胆憂思（『菅家文章』卷七、「崇福寺綵錦宝幢記」）

風情驚「沙漠」、露胆謂「虚無」（『本朝続文粹』卷一、大江匡房「西府作」）

「佳趣」は、よい趣。「佳趣」は、ここでは頭長の催す白居易を祭る儀式のことをいう。それでは、自らの行う祭奠を「佳」であらわすのは拙いと言えよう。

対玩有「佳趣」、使我心渺綿（『初唐張九齡「題下画「山水障」」）

夜雪有「佳趣」、幽人出「書帷」（『白氏文集』卷十四・0756、「春夜喜雪」、有「懷王二十二」）

喜雪、有「懷王二十二」

藤原敦光「白居易祭文」注釈

感「其形概之靈奇、増以「水樹之佳趣」（『江吏部集』卷上、「夏日陪「左相府書閣、同賦「水樹多「佳趣」、応「教」詩序。『本朝文粹』卷八）

「風骨」は、作品の心と文辞。

文章卓犖<sup>イケトキ</sup>、無敵、風骨英靈歿有神（『白氏文集』卷五十七・2784、「哭「微之」二首」ノ二）

先師独擢「予詩」曰、綴韻之間、甚得「風骨」（『本朝文粹』卷八、紀長谷雄「延喜以後詩序」）

是風骨之鯁<sup>フキコト</sup>、之令<sup>オソキコト</sup>然也、是月將之驚、之令<sup>オソキコト</sup>然也（『江吏部集』卷上、「八月十五夜、江州野亭、对「月言」志」。『本朝文粹』卷八）

なお、『経国集』序に「斉梁之時、風骨已喪、周隋之日、規矩不存」とあり、その注釈である小島憲之『国風暗黒時代の文学 中下』は、

「風骨」について詳しく述べている。「英材」は、優れた才能、またその才能を有する人。儀式の趣旨は、詩文の才能を授けられるよう白居易に祈願することであった。

游夏之英才、伊顔之殆庶（『文選』卷五十四、劉孝標「弁明論」。李善注「孟子曰、得「天下之英才」、而教育之」）

英材明悟、為「衆所推」（『懷風藻』、釈道慈伝）

右丞相開「客館」、以延「英才」焉（『本朝文粹』卷八、橘広相「賦「冬日可「愛」詩序」）

「尚饗」は、なにとぞお受け願いますの意。神靈に対して願望を述べている。祭文末尾の常套句。『新撰字鏡』（卷十二）には、「庶幾 僥倖

也。又、尚、己比弥加波久波、類聚名義抄（僧上）の「尚饗」に対する訓には、「コヒネカハクハウケタマヘ」とある。

神而有<sup>レ</sup>靈 儻垂<sup>モシ</sup>尚饗（『芸文類聚』卷三十八・祭祀、晉王珣「祭徐聘士二文」）

念<sup>オモハクハナシ</sup>爾有<sup>レ</sup>靈 知<sup>レ</sup>予此意。尚饗（『白氏文集』卷三十九・1839、

「祭呉少誠二文」）

精祈之至、請垂<sup>二</sup>冥感<sup>一</sup>。尚饗（『朝野群載』卷三、藤原令明「地神供祭文」）

### （現代語訳）

ああ、昔この世においての時、詩文に才ある人たちは、その華やかな文藻を盗み、今祭典に臨んで、学殖少ない頑愚の私は、その文辞を追慕しております。かの折りはかの折り、今は今で敬仰しております。ぜひお願い申し上げます、この心からなるよき趣向をとくとお含みの上、詩文の心と文藻を授けて下さいますことを。なにとぞお受けいただきますように。

### 付説

この「白居易祭文」は、保延四年二月十日藤原頭長が白楽天への敬慕の思いを述べた上で、新作の楽天像を掲げて供物をそなえ、詩文の才を与えられんことを求める儀式のために作られた文章である。影供と称すべき頭長のこの催しは他に所見なく、祭文以外に内容を知る手掛かりは

ない。同類の催しである、元永元（一一一八）年に藤原頭季が催した柿本人麿影供には「柿本影供記」が備わり、その模様を詳しく知ることができる。それによれば、催しの終わりに参会者によって歌会が行われている。また、成實堂文庫本「作文大体」に付せられた源通親「擬香山模草堂記」（川口久雄「方丈記の先蹤文学の一資料・成實堂本文大体所収源通親久我草堂記」）、金沢大学法文学部論集・文学篇「第七号。品川和子「擬香山模草堂記について」、王朝文学論考」所収、参照）によれば、白居易像を掲げて行つた催しには、「東西書之新寶」（文章院の学生）「城北好才」を招いており、詩を詠じたはずである。これらによれば、頭長の場合も作文会を伴つた可能性が高い。祭文で「授以風骨之英材」と訴えているのであるから、詩作があつたと見るのが妥当である。それは今後の詩文上達を目指す契機ともなつたはずである。

『白氏文集』伝来以降、白居易は常に尊崇の対象であつた。白詩に接した当初は、見事な詩を読む人物への憧憬尊敬を抱くのみであつた。やがて文人らの居易観は変化する場合がある。たとえば、高階積善「夢中同謁白大保元相公」（『本朝麗藻』卷下・讃徳部）の「高情不識又何神」に付せられた自注に「白太保伝云、大保者是文曲星神。而相公未見其所伝矣」とあり、居易を「文曲星神」と言つのである。「白大保伝」の作者・成立時期などは不明であり、いかなる事情から神格化する伝が生まれたのかも分かっていないのだが、この見方は当時広まっていたのであろう。ほかに、源通親「擬香山模草堂記」には「小年読白楽天之伝、其身爲文曲星之化」と記し、東大寺図書館蔵「普通

唱導集』の「白居易」には、「蓋是文曲星之精靈也」と述べ、文曲星の化身であるとする。前者には、「白氏将案<sup>レ</sup>彰、文星化入<sup>レ</sup>夢、惕覚感<sup>二</sup>靈威<sup>一</sup>、肅潔供<sup>二</sup>茶菓<sup>一</sup>」「模<sup>二</sup>香山<sup>一</sup>案<sup>二</sup>真影<sup>一</sup>」「祭奠始<sup>レ</sup>之路近」、後者には、「今恭敬之余、致<sup>二</sup>礼贊設<sup>一</sup>」とある。影供などの儀礼において、白居易の誕生にまつわる異伝が伝えられ、またそのような場から文人たちの間に伝播浸透していったのであろう（山崎誠「もうひとりの白楽天・偽伝と偽書の世界から」、『白居易研究講座』第四卷所収、参照）。このように居易を文曲星神または文曲星の化身と見なす時代にあつて、藤原敦光の祭文も、「台彩早入<sup>レ</sup>孕」と三台が懐胎して誕生したと述べている。ただ、詩文の才を授けてほしいと請い願う対象になつてはいるが、「白大保伝」のような神格化にまでは到っていない。また、「台彩」が前述した三台の光輝の意だとすると、「擬<sup>二</sup>香山<sup>一</sup>模<sup>二</sup>草堂記<sup>一</sup>」と『普通唱導集』のいう文曲星の化身とする見解とはまた異なる。別種の伝の存在を認めるべきである。